



Title	マルセル・プルーストと化学教育：『失われた時を求めて』におけるその表れ
Author(s)	
Citation	令和5（2023）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2024
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/95155">https://hdl.handle.net/11094/95155</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 令和5年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	むらき しんのすけ 村木 伸之輔	学部 学科	文学部	学年	3年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	平光 文乃	所属	人文学研究科（文学部）		
研究課題名	マルセル・プルーストと化学教育—『失われた時を求めて』におけるその表れ—				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				

### 1. 研究目的

本稿ではマルセル・プルースト著『失われた時を求めて』内の一節に、水を「水素と窒素の化合物」という様に表現していたことに着目した筆者の拙論<sup>1</sup>を発展させ、プルーストの受けた化学教育を彼自身の伝記的情報やフランスにおける第三共和政下における教育事情をもとに調査し、彼がどれほどまでに当時の化学を受容していたのかを明らかにし、その表れを『失われた時を求めて』の本文に見出すことを目的とする。プルーストに関する研究は現在数多く存在し、いまだに十分な調査が行われていない領域は少なく、本研究主題と同じ理系的な分野でも、「科学技術」をテーマとした研究は多く存在するが、「化学」に焦点を絞った研究は少ない。したがって本研究を通して、プルースト研究の新しい分野を確立することが期待できる。

### 2. 研究計画・方法

方法としては、第一に先行研究を調査し、その内容を整理する。上述の拙論で参照したものに加えて、海外のものも含めた新しい文献に当たる。第二にプルーストと化学にまつわる伝記的な情報や、彼が教育を受けたとされる第三共和政下における化学教育について調査し、プルースト自身がどれほど化学について知識を持ち合っていたのかを明らかにする。第三に『失われた時を求めて』内における「化学」に関する表現にはどのようなものがあるかを抽出する。プルーストの持ち合わせる化学の知識や、それらがどのような文脈で用いられているのかを意識し、彼がどのような意図をもってその記述を行ったのかを考察する。

<sup>1</sup> 村木伸之輔「プルーストと化学「結晶化、水素と窒素などから見る」」、2023、フランス文学作品論

### 3. 研究結果

#### 3. 1. 先行研究

プルーストと化学の関係について直接的に論じた日本語論文は筆者の拙論、「プルーストと化学「結晶化、水素と窒素などから見る」」並びに、本郷美琴「なぜ水は「水素と窒素の化合物」に見えたのか」2023, フランス文学作品論 IV 演習期末レポート、が挙げられる。はじめにこれらの概要を述べたのち、プルーストとリセ・コンドルセにおける教育とを関連付けて述べた論文を紹介する。

村木伸之輔「プルーストと化学「結晶化、水素と窒素などから見る」」2023年、フランス文学作品論 IV 演習期末レポート。では、化学ではないが、プルーストは科学技術についての関心が高く、これを受容していたということ、プルーストとの交流のある人物の教養レベルが高いこと、彼がリセ・コンドルセで受けた教育は当時からしても高水準なものであり、理系分野にも力を入れていたことが明らかになっていること、以上の観点からプルースト自身には少なくとも一般以上の化学の知識が備わっていたということを明らかにした。その後、「結晶化」という語の用い方や、「水素と窒素の化合物」という本来であれば水素と酸素の化合物であるはずの水を敢えて異なる元素で表現していたことに着目し、その結果として「結晶化」に関しては有機化学の発展しつつある時代においてプルーストが「ヴェネツィアのカレの様子に規則正しさや安定感、精密さを見出した」<sup>2</sup>ゆえにこのような比喩を用いることが出来たとした。また水を「水素と窒素の化合物」であるとした点については以下の引用の通りである。

「私は窒素のフランス語における命名および、窒素と酸素の安定性に着目する。窒素はフランス語で「azote」というのだが、これを命名したのはラボアジエで、「生きられないもの」という意味を持つ。この表現が登場した場面で私は母と別れたことによる尋常ではない孤独感にさいなまれており、窒素の表す「生きられないもの」と合致する。また酸素と窒素の安定性についてだが、酸素が分子となった際は不安定であるのに対し、窒素は非常に安定する物質であることがわかっている。窒素は安定性の高い物質ゆえに、地球上ではるか遠い昔に自然発生してからその数を減らさないでいる。そのため空気中に占める割合が大きいのだという。孤独感から精神の安定を失う「私」と、「私」がヴェネツィアに滞在し慣れ親しむより前に立ち返り、疎外感を与える都市と、そこを流れる安定性の高い物質を取り込んだ水とが対比して描かれているのではないかと考えた。」<sup>3</sup>

以上のように拙論では、プルーストと化学並びに化学教育との関わりを明らかにしたのち、『失われた時を求めて』内における化学に関する表現の一部について考察した。

本郷美琴「なぜ水は「水素と窒素の化合物」に見えたのか」2023年、フランス文学作品論 IV 演習期末レポート。では主題は筆者のものと同様であるが、そのアプローチの方法や参照した文献が異なっていた。本郷は真屋の論<sup>4</sup>を参考しながら件の記述にラスキンの影響を認め、水という化合物に生命力を認めるか否かを論点として出発している。さらに本郷は論を発展させ、プルーストがなぜ「あえ

IV 演習期末レポート。

<sup>2</sup> 同上、3 頁。

<sup>3</sup> 同上、5 頁。

<sup>4</sup> 真屋和子著『プルースト的絵画空間：ラスキンの美学の向こうに』、水声社、2011 年。

て」このような事実に反する表現を用いたのかを彼のレトリックの観点から考察した。本郷は吉川<sup>5</sup>や真屋<sup>6</sup>の論を援用しながら、プルーストのこのレトリックにはラスキン並びに彼自身の絵画を鑑賞する際の態度が影響しているということを明らかにした。その結果プルーストはエルスチールと共に通ずる、知識による理解ではなく感じたままに物事を描写するという態度を、比喩を通して示しているということが明らかとなった。

横山裕人「リセ・コンドルセの教師たち：プルースト時代のフランス古典中等教育の一側面（前編）」、成蹊法学、第88号、307-340頁、2018年。並びに横山裕人「リセ・コンドルセの教師たち：プルースト時代のフランス古典中等教育の一側面（後編）」、成蹊法学、第89号、207-250頁、2018年。において横山は、実際にプルーストが中等教育を受けたリセ・コンドルセに当時勤務していたフランス語・古典語系の教員並びに校長、教頭の人物像を徹底的に調べ上げ、彼らを年齢、地理的出自、社会的出自、業績の観点から分析し、リセ・コンドルセの「校風」を考察した。さらに彼ら個々人の教育に向き合う態度について言及し、当時のラテン語教育改革のうねりやその結果と、リセ・コンドルセでなされてきた教育とを結びつけ、プルーストの思春期における文筆活動へ与えた影響を示唆した。

以上が先行研究のまとめである。これらの研究をもとに本論は執筆されている。

### 3.2. プルーストと化学教育の調査

プルーストと化学との結びつきについては *Dictionnaire Marcel Proust / publié sous la direction d'Annick Bouillaguet et Brian G. Rogers*” (Honoré Champion, Nouv. éd. rev. et corrigée, 2014) (以下プルースト辞典とする。)、並びにジャン=イヴ・タディエ著、吉川一義訳『評伝プルースト 上』、筑摩書房、2001。を参考とする。

プルースト辞典では直接化学と書かれている項目はないものの、sciences (科学) の項目にプルースト並びに『失われた時を求めて』と様々な自然科学全般との関係性が記述されている。それによると、「10代の頃、プルーストは自然科学を除いた学問的な分野では抜きんでているということではなく、彼の興味は先生であるジョルジュ・コロンによって掻き立てられていた。この若き日の情熱は、V.E. グラハムによる『失われた時を求めてにおける比喩 (images) の記録簿』からたどることが出来る。V.E. グラハムは、生物学から 160 点、物理学から 69 点、数学から 32 点、天文学から 45 点、地質学と考古学\*から 16 点、化学 (または鍊金術) から 35 点、発明から 56 点を含む、いわゆる厳密科学から借用した 430 点の比喩を挙げている。このリストには、プルーストが厳密な科学であると主張している医学\*は含まれていない。」<sup>7</sup>と記載されており、『失われた時を求めて』内に科学的な比喩が多数存在すること、本稿で取り上げている化学に関するものに絞っても 35 点存在すること、彼が 10 代から自然科学に親しんでいたことなどが記されている。この sciences の項目では、彼が昆虫学や植物学特に関心を持っていたことが明らかとなっている。

続いてジャン=イヴ・タディエ著、吉川一義訳『評伝プルースト 上』、筑摩書房、2001。ではプルーストのリセ・コンドルセ時代の過ごし方や彼の成績が明記されている。まず前提として、リセ・コ

<sup>5</sup> マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 4 花咲く乙女たちのかげに II』、岩波書店、2012年、あとがきより。

<sup>6</sup> 真屋和子著『プルーストの美』、法政大学出版局、2018年。

<sup>7</sup> ”*Dictionnaire Marcel Proust / publié sous la direction d'Annick Bouillaguet et Brian G. Rogers*”、Honoré Champion、Nouv. éd. rev. et corrigée、2014年、921頁。

ンドルセの教育水準は「こんにちでは想像を絶するほど高かった」<sup>8</sup>ようである。その高い教育水準の中でプルーストは「二年次に（中略）理科が首席二位」<sup>9</sup>、「十二歳となった三年次（1883-1884年）では、長期欠席の後でもあり、賞がとれたのは理科の次席三位」<sup>10</sup>とされとり、持病の問題があつても成績を高く保てるほど理科系の学問に強い少年であったということがうかがえる。その理由としては理科の教諭であったコロンの存在が挙げられており、本書では「理科で賞をもらったのは、未来の作家として、この分野にたいする早熟な嗜好を示している」<sup>11</sup>とも、「このうえなく強力な比喩を生み出すことになる」<sup>12</sup>とも言われている。実際に『失われた時を求めて』内の「ソドムとゴモラ」の章ではシャルリュスとジュピアンの出会いを綴る中で昆虫による花の受精の様子が細やかに描かれており、プルースト自身の科学的素養の高さを感じさせる。加えて化学描写に関しても、「私はスワンのそばを離れる気にはなれなかった。スワンは、その病人の身体が、さまざまな化学反応の観察されるレトルトとしか思えないほど、疲労の極みに達していた。その顔は、ブルシアンブルーの小さな斑点がいくつも出て、もはや生者ものとも思われず、高等中学校（リセのルビ）で「実験」後の「理科」の教室に残るのがいやになるあの臭いと同様の、独特の臭気を放っていた。」<sup>13</sup>との記述があり、本作が自伝的な側面を含んでいる小説だということを加味すると、筆者であるプルーストがリセ・コンドルセに通っていた当時の理科での経験を強く記憶しているとも考えられる。

以上のことからプルーストがその豊かな科学的比喩、ひいては化学的比喩を駆使することの要因として、リセ・コンドルセ時代に受けた教育の影響を認めることができると考える。

### 3. 3. 『失われた時を求めて』における化学に関する表現

続いて『失われた時を求めて』における化学を用いた比喩（隠喩）について考察する。本稿では同作品中から二点に着目する。一点目は「花咲く乙女たちのかげに II（土地の名一土地）」においてアルコールに酔った私が自身のいるレストランを「自然界では偶然たまに出会えるかどうか」という物質を大量に生産する化学工場のように、<sup>14</sup>と表現した点であり、二点目は「見出された時 II」において老けたオデットの容貌を「自然の法則におけるラジウムの保存の挑戦よりも、年代の法則に対するさらに奇跡的な挑戦であるように思われた。」<sup>15</sup>と表現した点である。その際プルーストが教育によって得たとされる化学的知識が彼なりのレトリックの手法とどのように結びついて本文に表出しているのかということを主軸に考察する。

はじめに一点目である「花咲く乙女たちのかげに」における「化学工場」の隠喩について考察する。当該部分を少々長くはなるが引用する。

<sup>8</sup> ジャン=イヴ・タディエ著、吉川一義訳『評伝プルースト 上』、筑摩書房、2001、68 頁。

<sup>9</sup> 同上 69 頁。

<sup>10</sup> 同上。

<sup>11</sup> 同上。

<sup>12</sup> 同上。

<sup>13</sup> マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 8 ソドムとゴモラ I』、岩波書店、2015、229-230 頁。なおレトルトとは同 231 頁の脚注(237)によると、「上流の化学実験を行う器具。」であり、本書には『二十世紀ラルース』から転載された図が掲載されている。

<sup>14</sup> マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 4 花咲く乙女たちのかげに II』、岩波書店、2012、374 頁。

<sup>15</sup> マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 14 見出された時 II』、岩波書店、2019、82 頁。

「このリヴベルのレストランは、自然界では偶然たまに出会えるかどうかという物質を大量に生産する化学工場のように、散歩の途中や旅先で一年のうちにたまたま出会える女性よりはるかに多くの女性たち、それも内に秘めたさまざまな幸福の可能性によって私を惹きつける女性たちを一時に集めていた。しかも聞こえてくる音楽—ワルツや、ドイツのオペレッタや、カフェ・コンセールの歌など、いずれも私が聞いたこともない音楽をアレンジしたもの—それ自体が、いわば空中に存在する快楽の場であり、地上の快楽のうえにつみ重なってそれ以上の陶酔をもたらしてくれた。」<sup>16</sup>

以上の引用箇所はリヴベルでの夕食で普段の平静を失った「私」がアルコールを大量に摂取した後に語った箇所である。「私」の好みにかなうような女性が大量に集まっているレストランが、「化学工場」に喩えられている点が印象深い。この場面で「化学工場」という比喩が用いられている理由として、まず化学工場が人為的なものであるということが挙げられる。化学工場は、人間が新たに化学物質を生産できるように建造された、人間の手を介した施設である。本文で「「私」の好みにかなうような女性たち」と対になっているのは「自然界では偶然たまに出会えるかどうかという物質」であり、普段の生活、すなわち自然では到底出会うことのできない女性たちを置き換えているのは文字通りである。そのような女性たちが、レストランという人間によって作られた会食施設に集う点が「化学工場」と「レストラン」との結びつきに繋がると考えられる。

ここで単語のイメージについて考察する。なぜ「化学工場」でなければならなかつたのかというと、「化学工場」で作られる「化合物」は、完全に人間の創造物ではなく自然界にもわずかながら存在するものを、あくまでも人間の手によって大量生産されるものである。そのため「私」の好みの女性という対象にも合致する。

なおこの場面で「自然界では偶然たまに出会えるかどうかという物質」に喩えられた「女性たち」のイメージは、次いでレストラン内で奏でられている「音楽」へと移動する。「私」は「音楽」の中に「女性」を感じ、アルコールの酔いも相まって快楽を感じていく。ここで奏でられている「音楽」もまた、「私が聞いたこともない」<sup>17</sup>という表現から明らかに、自然に生活していくはなかなか会うことのないものであった上に多種多様なものであった。また原文のフランス語では<sup>18</sup>「化学工場」は“ces industries chimiques”、「女性」は“femmes”、そして音楽は“la musique”とすべてが女性名詞であり、これら三つの単語につながりが持たされていることが分かる。従って、「化学工場」からつながる比喩は「音楽」にまで及んでいると考えられる。なお「女性」と対になっているとした「物質」は”des corps”と男性名詞であり、男性名詞から女性名詞への転換、そして女性名詞の連続による換喻と鮮やかに比喩が展開されている。この「音楽」の調べに陶酔しながらも「私は、「とはいひ私は、こんな歌にもどこか過酷なところがあるのを感じていた。(中略) 嫉妬に苦しむ不幸な男にとって、そんな歌は情け容赦を知らぬ出口なき地獄にほかならず、」<sup>19</sup>とあるように、今後の展開に関する重要な示唆を残している。というのも、「化学工場」から生成される「物質」に

<sup>16</sup> マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 4 花咲く乙女たちのかげに II』、岩波書店、2012年、374-375頁。

<sup>17</sup> フランス語の原文では“toutes nouvelles”、つまり「まったく新しいもの」であり工場が生産する新しい化合物という印象とも合致する。Marcel Proust, “À la recherché du temps perdu, II”, Gallimard, 2020年、169頁、より。

<sup>18</sup> 同上。

<sup>19</sup> マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 4 花咲く乙女たちのかげに II』、岩波書店、2012年、375頁。

喩えられたバルベックの女性たちの中には「私」と後に恋人関係になり「私」の人生に重大な影響を及ぼす、アルベルチーヌ・シモネも含まれているからだ。作中でこのリヴェルでの夕食の後から数多の女性のことを考え、女性と近づくことばかりに頭を使う「私」であるが、その中でもアルベルチーヌのことは日が経っても「私は以来その顔をしばしば過去の日々に再投影しては、自分の部屋にいる娘について心のなかで叫ぶことが出来たのである、「あの娘」だ！」<sup>20</sup>、とあるように常に頭から離れないでいる。吉川によるとこの記述は「この娘が将来「私」の部屋にいることを暗示する。」<sup>21</sup>ものであり、この出来事以前から「シモネ嬢」として目を付けていた私は、夕食会をきっかけに彼女と触れる機会を増やし、ついに画家のエルスチールからその名前を伺うというのが物語の流れである。吉川の論から転じると、先の「嫉妬に苦しむ不幸な男」というのは「囚われの女」における「私」自身であると考えられ、「化学工場」に始まる一連の比喩がアルベルチーヌとその後の「私」という物語上重要な展開に結びついていることの証左である。

以上のことから、「化学工場」という比喩から始まる一連の記述は、人為的な施設であるレストランを喻えることを起点とし、自然界の物質を女性に転換、さらに音楽へと喻え、音楽の描写を通して今後の展開を暗示することを試みたものであると考えられる。

続いて「見出された時 II」におけるオデットの容貌の変化をラジウムの法則に喻える場面について考える。こちらも当該部分を引用する。

「ただひとりフォルシュヴィル夫人だけは、皮膚を膨らませはするが変質させることのない液体、一種の流動パラフィンを注入されたみたいに、昔の粋筋の女（ココットのルビ）のまま永遠に「標本化された」ように見えた。（中略）人々が昔のまま変わっていないという先入観から出発すると、その人たちが老けたと思わざるをえない。ところがいったんその人たちは歳をとったいう考えを出発点にすれば、その人たちに再会したとき、ひどく老けた思わなくてすむ。オデットの場合は、それだけではなかった。その年齢を心得たうえで、さぞやお婆さんになっただろうと想いこんでいると、オデットの容貌は、自然の法則にたいするラジウムの保存の挑戦<sup>22</sup>よりも、年代の法則にたいするさらに奇跡的な挑戦であるように思われた。」<sup>23</sup>

以上の引用は様々な土地を巡ってきた「私」が、文学創造の啓示を受け幼少期を育ったコンブレーに戻りゲルマント大公邸のパーティに参列したものの、自分も老いているばかりか、かつて顔なじみであった人々がみな老いてしまい、誰が誰だか一目では分からくなっていることに困惑していたが、フォルシュルヴィル夫人（＝ジルベルト）とオデットだけは反対にその姿がまったく変化していないことに驚きを隠せていない、という場面である。ここで着目すべきは「流動パラフィン」と「ラジウム」という二つの化学用語がこの母娘で別々に用いられているということと、「法則」への言及である。

まずは「流動パラフィン」と「ラジウム」について考察する。ジルベルトとオデットの二人はどう

<sup>20</sup> 同上、409 頁。

<sup>21</sup> 同上、注(333)より。

<sup>22</sup> 吉川によると、「ラジウムは 1898 年にキュリー夫妻によって発見、数年後に分離抽出された（この功績により 1903 年にノーベル賞受賞）。発見されたラジウム 226 は、半減期が 1600 年とされる。」という。マルセル・ブルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 14 見出された時 II』、岩波書店、2019 年、83 頁、注(45)より。

<sup>23</sup> 同上、82 頁。

ちらも年老いていないという点に変わりはないが、ジルベルトの方に「流動パラフィン」という比喩を用いている。流動パラフィンとは「比較的軽質の潤滑油留分から精製した無色・無味・無臭の油状液体。化粧品の原料や精密機械の潤滑油、軟膏の基剤などに用いる。」<sup>24</sup>とされる化合物で、肌に塗る事で保湿効果が期待できる産物である。フランス語で *paraffine* を調べると、「20年も前のことだが、化学実験室では不思議な白い真珠のような物質が発見され、他の物質との親和性がないことからパラフィンと名付けられた（ラテン語の *parum affinis* から）。」<sup>25</sup>という記述がみられた。村木<sup>26</sup>や本郷<sup>27</sup>により化学用語の語源をたどり文学的に使用することはプルーストの用いる手法の一つであると考えられることから、この場合も彼はジルベルトがあまりにも若さを留めたままであるので、「他の物質との親和性がない」様子を表すためにこの単語を利用したと言える。また『19世紀ラルース』には「パラフィンは非常に安定、平衡を保っている物質であり、これがパラフィンという名前の由来でもある。」<sup>28</sup>という記述があり、ジルベルトの姿が変化していないことがパラフィンの安定性になぞらえられていると言える。オデットの側に「ラジウムの保存の挑戦」という語を用いた理由に関しては吉川が示している通り、「発見されたラジウム 226 は、半減期が 1600 年とされる」<sup>29</sup>からであり、その性質がまさに半永久的なもの、すなわち「自然の法則にたいする保存の挑戦」であると言え、その姿を昔と全く変えることなくとどめていたオデットの姿を現すのにまさに適切な比喩と言える。「流動パラフィン」がジルベルトに、「ラジウム」がオデットになぞらえられた理由は、娘であり元の年齢が若かったジルベルトの方がその見た目を維持した程度がオデットよりは低かったからであると考えられる。「流動パラフィン」自体は本文にもるように若返らせる効果はなく、単に保湿をして肌につやを与えるだけの物質である。それゆえ彼女の見た目は「私」が幼いころのオデットのようなものになっている。しかし「ラジウム」はそれ自体が 1600 年もの長きにわたって半減しない恒久の物質であり、オデットはジルベルトの母で年上であるにもかかわらずジルベルトの方を一瞬オデットだと思い込んでしまうほどの若さを維持していることに対する「私」の驚きがよく表れている。

次いで「自然の法則」や「年代の法則」など「法則」という言葉を用いている点に、プルーストがなぜこのような化学的な比喩をあえて用いるのかという理由を考察したい。まず前提としてプルーストがこのような比喩を用いる要因として真屋は「科学的知識と芸術の相違であり、客観主義に

<sup>24</sup> 「デジタル大辞泉」、小学館、2023年12月13日アクセス、

[https://kotobank.jp/word/%E6%B5%81%E5%8B%95%E3%83%91%E3%83%A9%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%B3-149761#goog\\_rewinded](https://kotobank.jp/word/%E6%B5%81%E5%8B%95%E3%83%91%E3%83%A9%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%B3-149761#goog_rewinded)。

<sup>25</sup> Terme de chimie. Substance solide, blanche, tirée des schistes bitumineux et formée exclusivement de carbone et d'hydrogène dans les proportions convenables pour donner une flamme bien éclairante.

Il n'y a pas vingt ans, on se montrait dans les laboratoires de chimie une substance curieuse, blanche et nacrée, à laquelle on avait donné le nom de paraffine, en raison de son peu d'affinité pour les autres corps (du latin *parum affinis*) ; découverte en 1831 dans les produits de la distillation de la houille par Reichenbach, cette substance resta sans emploi jusqu'au jour où Sellègue en confectionna des bougies, Ch. Martin, Monit. univ. 28 juin 1867, p. 828, 4e col. "Littré (XM Littré v2)"、2023年12月13日アクセス、

<https://www.littre.org/definition/paraffine>。

なおラジウムの由来はラテン語の *radius* (光線) である。「日本大百科全書」、小学館、2023年12月13日アクセス、<https://kotobank.jp/word/%E3%83%A9%E3%82%B8%E3%82%A6%E3%83%A0-147145>。

<sup>26</sup> 村木伸之輔、前掲論文。

<sup>27</sup> 本郷美琴、前掲論文。

<sup>28</sup> "Grand dictionnaire Universel du XIXe siècle, vol. 12"、Larousse、1866年、182頁。

<sup>29</sup> マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 14 見出された時 II』、岩波書店、2019年、83頁、注(45)。

対する主観主義、印象主義の芸術における優位」<sup>30</sup>がプルーストの中にあるからだと説いている。実際にプルーストはそのような美的感覚、比喩に対する向き合い方を持っているため、ひとつの要因としては挙げられる。ではなぜ「法則」という語の使用がプルーストが科学的な比喩を用いる理由につながるのか。プルーストが *Annales* 誌のアンケートで、「「法則を発見し、未知のものに光を当てるのに役立つものすべて」を大切にしている」<sup>31</sup>と述べており、「比喩を調整することはプルーストが目指す作家の在り方において最も重要な手法であり、科学者に要求されるのと同じくらい厳格な規律を必要とする。なぜなら、それは二つの現実の間に「唯一無二の関係」を見出すことであり、芸術の世界における類似（analogue）は、科学の世界における因果律の持つ唯一無二の関係と酷似している。」<sup>32</sup>という記述が見られるからである。すなわちプルーストは文体論において科学的なものの見方をすることが芸術創造と結びつくと考えており、その主軸にあるのが「法則」の発見であるという態度を取っている。従ってこの場面で化学の比喩が、「法則」という言葉とともに登場することは妥当なことであると言える。

### 3. 4. 結びに変えて

本稿では『失われた時を求めて』における化学に関する比喩について、まずプルーストの受けた教育と化学とのつながりを明らかにし、どのような意図をもってなされた比喩であるのかを明らかにした。プルーストの伝記的情報から彼が少年時代から自然科学に関心があったこと、そしてその関心と知識が文学的創作活動にも生かされていることが判明した。またそのような教育を受けたのち、真屋や本郷の論でも示されていたようにラスキンの影響を受けたプルーストが、事物を科学的に観察し表現することを重視していたことも明らかとなった。さらに『失われた時を求めて』本文からは2点ほど化学に関する比喩が用いられている例を示し、その理由を明らかにした。「化学工場」の比喩は換喻によるその後の物語の示唆と密接に関わっているということを示した。「流動パラフィン」と「ラジウム」の比喩についてはフランス語の成立から分析することで筆者の意図を読み取ることが出来た。

今後の展望としてはより教育に着目し、横山の手法を用いてリセ・コンドルセでプルーストに教鞭を振った理科系教員の情報を調査することで、さらに化学教育とプルーストの創作活動との関連性を明らかにしたい。加えて海外文献としてはいずれも化学について特に着目しているものというよりも、科学一般についてとプルーストとの結びつきについて着目したものであるが、Jean-Pierre Ollivier, *Proust et les sciences* (Honoré Champion, 2018)、François Vannucci, *Marcel Proust à la recherche des sciences* (Rocher, 2005)、Nicola Luckhurst, *Science and structure in Proust's À la recherche du temps perdu* (Oxford University Press, 2000)の三点が挙げられるため、これらを参照することで自説を更に補強したいと考えている。

### 3. 5. 参考文献

- ・マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 4』、岩波書店、2012年。
- ・マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 8 ソドムとゴモラ II』、岩波書店、

<sup>30</sup> 真屋和子著『プルーストの美』、法政大学出版局、2018年、73頁。

<sup>31</sup> "Dictionnaire Marcel Proust / publié sous la direction d'Annick Bouillaguet et Brian G. Rogers"、Honoré Champion、Nouv. éd. rev. et corrigée、2014年、923頁。

<sup>32</sup> 同上。

2015年。

・マルセル・プルースト著、吉川一義訳『失われた時を求めて 14 見出された時 II』、岩波書店、2019年。

・Marcel Proust, "À la recherché du temps perdu, II ", Gallimard, 2020年。

・ジャン=イヴ・タディエ著、吉川一義訳『評伝プルースト 上』、筑摩書房、2001年。

・真屋和子著『プルースト的絵画空間：ラスキンの美学の向こうに』、水声社、2011年。

・真屋和子著『プルーストの美』、法政大学出版局、2018年。

・"Dictionnaire Marcel Proust / publié sous la direction d'Annick Bouillaguet et Brian G. Rogers", Honoré Champion, Nouv. éd. rev. et corrigée, 2014年。

・"Grand dictionnaire Universel du XIXe siècle, vol. 12", Larousse, 1866年。

・横山裕人「リセ・コンドルセの教師たち：プルースト時代のフランス古典中等教育の一側面（前編）」、成蹊法学、第88号、307-340頁、2018年。

・横山裕人「リセ・コンドルセの教師たち：プルースト時代のフランス古典中等教育の一側面（後編）」成蹊法学、第89号、207-250頁、2018年。

・本郷美琴「なぜ水は「水素と窒素の化合物」に見えたのか」、2023年、フランス文学作品論 IV 演習期末レポート。

・村木伸之輔「プルーストと化学「結晶化、水素と窒素などから見る」」、2023年、フランス文学作品論 IV 演習期末レポート。

・「デジタル大辞泉」、小学館、2023年12月13日アクセス、

[https://kotobank.jp/word/%E6%B5%81%E5%8B%95%E3%83%91%E3%83%A9%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%B3-149761#goog\\_rewareded](https://kotobank.jp/word/%E6%B5%81%E5%8B%95%E3%83%91%E3%83%A9%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%B3-149761#goog_rewareded)。

・「日本大百科全書」、小学館、2023年、12月13日アクセス、

<https://kotobank.jp/word/%E3%83%A9%E3%82%B8%E3%82%A6%E3%83%A0-147145>。

・"Littré (XM Littré v2)"、2023年12月13日アクセス、

<https://www.littre.org/definition/paraffine>。